



# 1 歳児期の親のかかわりと 愛着関係

梅崎 高行

人は、愛着とよばれる他者との信頼関係を基礎に、発達していく。子どもは生まれた当初から、実に個性的な存在である。そのため子育ては、難しく、また楽しくもある。この章では、親がどのように子どもへのかかわりを持ち、愛着関係を築いていこうとしているかについてみていく。

## ● 子どもとのかかわりと親の養育態度

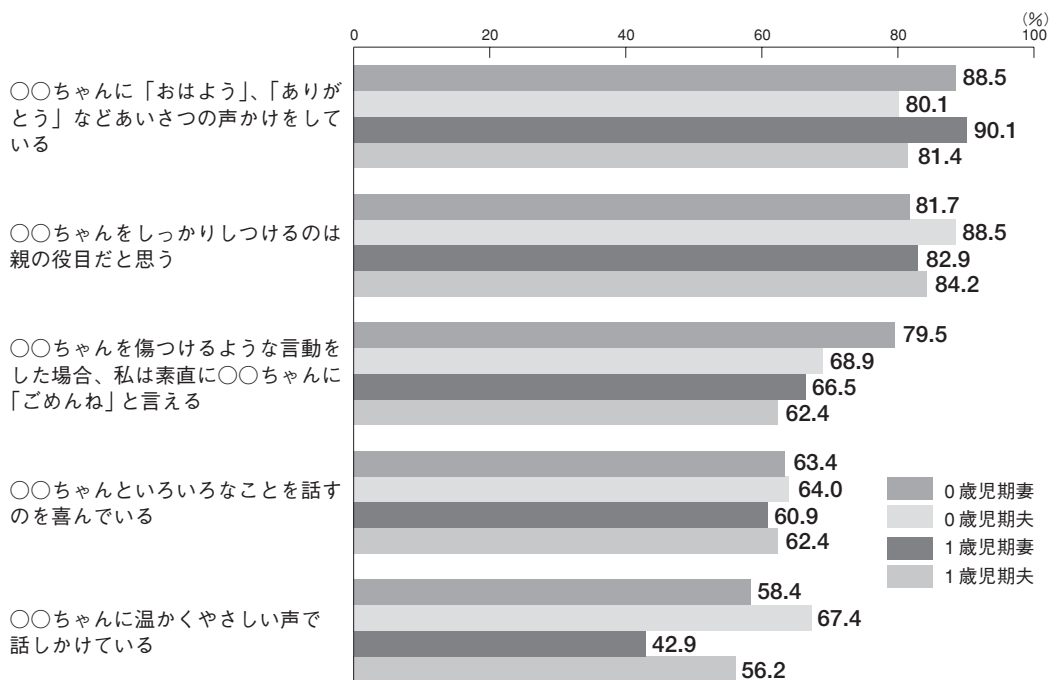
初めての子どもを持つ妻・夫は、子どもが0歳から1歳になる時期に、子どもへのかかわり方をどのように変化させているだろうか。子どもへのかかわり（養育態度）を尋ねた5項目について、〔妻－夫〕問および〔0歳児－1歳児〕時点のそれぞれで比較した（図1-1）。

その結果、「○○ちゃんをしっかりとしつけるのは親の役目だと思う」（0歳児期妻81.7%→1歳児期妻82.9%、0歳児期夫88.5%→1歳児期夫84.2%）、「○○ちゃんに『おはよう』、『ありがとう』などあいさつの声かけをしている」（0歳児期妻88.5%→1歳児期妻90.1%、0歳児期夫80.1%→1歳児期夫81.4%）の2項目は、妻・夫ともに0歳から1歳にかけて、「あてはまる」の割合が8割を超えたまま推移した。

一方、0歳から1歳にかけて「○○ちゃんを傷つけるような言動をした場合、私は素直に○○ちゃんに『ごめんね』と言える」（0歳児期妻79.5%→1歳児期妻66.5%、0歳児期夫68.9%→1歳児期夫62.4%）、および、「○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている」（0歳児期妻58.4%→1歳児期妻42.9%、0歳児期夫67.4%→1歳児期夫56.2%）の2項目は、妻・夫ともに数値の減少がみられ、特に妻のほうで減少が大きかった。「素直に『ごめんね』と言える」が13.0ポイント（夫は6.5ポイント）の、「温かくやさしい声で話しかけている」が15.5ポイント（夫は11.2ポイント）の、減少を示した。

以上4項目には、しつけに対する親の高い意識が表れているとともに、実際に1歳児期までに、しつけ行動が始まっている様子が見えてくる。「あいさつの声かけをしている」の項目が高い値を示したのは、多くの親が基本的な生活習慣を大切と考え、毎日の生活の中で実行しているからだろう。また、減少がみられた2項目については、この時期の子どもが手放しにかわいいだけの存在ではないことを示している。おそらく親は、1歳児期を過ぎて子どもの側に芽生えた自己決定あるいは自己主張との衝突を余儀なくされているだろう。そのような場面に際して、親は必要に応じて行動の禁止や抑制を行っているはずである。その際、思いが通らなかった子どもは泣くなど、一時的に傷つくようなことが出てくるかもしれない。しかし、泣くのがかわいそうであるという理由でごめんねと謝ったり、傷つけることを避けて常に温かく接したりするといったかかわりはできないということだろう。なお、「○○ちゃんといろいろなことを話すのを喜んでいる」

図1-1 親の養育態度（0歳児期妻・夫、1歳児期妻・夫）



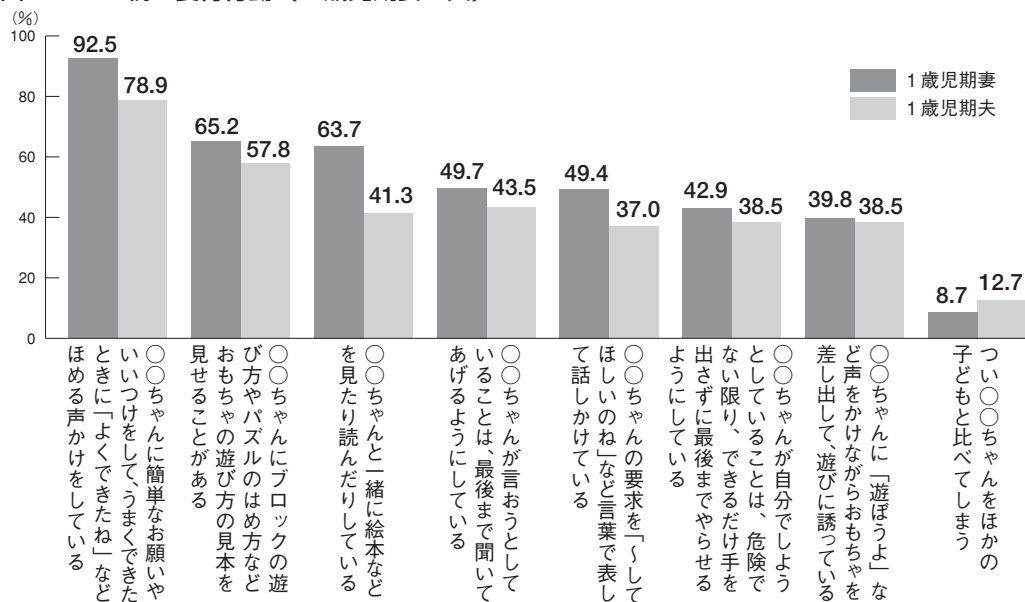
注)「あてはまる」の%。

の項目は、妻・夫とも0歳から1歳にかけて6割が「あてはまる」と回答した（0歳児期妻63.4%→1歳児期妻60.9%、0歳児期夫64.0%→1歳児期夫62.4%）。この割合は、言葉の発達が飛躍的に伸びる1歳以降の時期で、変化がみられるかもしれない。

## ●子どもとのかかわりと親の養育行動

次に、1歳児期で新たに尋ねた子どもに対するかかわり方（養育行動）の8項目について、[妻一夫]間の特徴をみた（図1-2）。その結果、妻・夫ともに高い割合で「あてはまる」と回答した項目には、「〇〇ちゃんに簡単なお願いやいいつけをして、うまくできたときに『よくできたね』などほめる声かけをしている」（1歳児期妻92.5%、1歳児期夫78.9%）があり、次いで「〇〇ちゃんにブロックの遊び方やパズルのはめ方などおもちゃの遊び方の見本を見せることがある」（1歳児期妻65.2%、1歳児期夫57.8%）、「〇〇ちゃんと一緒に絵本などを見たり読んだりしている」（1歳児期妻63.7%、1歳児期夫41.3%）があった。これら8項目のうち、夫婦間でポイント差が大きかった項目には、「一緒に絵本を見る」「簡単なお願いでのほめる声かけ」「〇〇ちゃんの要求を『～してほしいのね』など言葉で表して話しかけている」（1歳児期妻49.4%、1歳児期夫37.0%）があり、それぞれ22.4ポイント、13.6ポイント、12.4ポイントの差がみられた（いずれも妻のほうの値が高かった）。これら多くの夫婦が実施しているかかわり方のうち、「簡単なお願いでのほめる声かけ」と「遊び方の見本を見せる」は、教え導くような養育スタイルと言え、初めての子どもの持つ親にとっても用いやすい技術と思われる。一方、「〇〇ちゃんが言おうとしていることは、最後まで聞いてあげるようにしている」「要求を言葉で表す」など、共感や見守り型の養育は、教え導くスタイルに比べて高度な技術と考えられる。そのため活用の頻

図 1-2 親の養育行動（1歳児期妻・夫）



注) 「あてはまる」の%。

度は、3～4割台にとどまっているものと思われる。これら共感型の養育も、多くは妻によって行われている。

## 子育てに対する自信と子どもとのかかわり

最後に、子育てに対する自信と子どもとのかかわり（養育態度・行動）との関連についてみた。先ほども触れたように1歳児期の子どもは、ますます愛らしさを増してくる反面、自己主張を持ち始める。そのため子育てが難しさを増すことも多いが、日々のかかわりの末に、親も次第に子育てに対する自信を深めていけるようであれば望ましい。

まず、子育てに対する自信は、「子育てに自信が持てるようになった」の1項目（5件法、「あてはまる」5点～「あてはまらない」1点）を用いて尋ねた。妻・夫ともに、0歳から1歳にかけて「あてはまる」と「ややあてはまる」を合計した割合（自信あり群とよぶ）は変化せず、1歳児期妻の自信あり群は42.9%、1歳児期夫の自信あり群は37.9%であった（図1-3）。これは、経験を重ねることで単純に自信が深まるとはいえない、子育ての特質を示しているものと思われる。これ以降では、妻・夫の両者において、自信あり群と自信なし群（「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」を合計した割合）とを比較していく。

なお、参考までに子育てに対する自信と、子育ての悩みとの関連について示す（図1-4、図1-5。詳細は第2章参照）。1歳児期妻・夫が持つ悩みのうち、自信あり群と自信なし群とで共通に差がみられた項目として、「トイレトレーニングの時期・やり方がわからない」「言葉の遅れが心配だ」「〇〇ちゃんの性質や性格が気になる」があった。これら項目は、子どもの発達に関する悩みと総称できる。この結果からも、初めての子どもを持つ親が、子どもの発達の各時期において新たな悩みに出会い、子育てに対する自信を揺さぶられるような経験をしている可能性について、うかがうことができる。

図1-3 子育てに対する自信（0歳児期妻・夫、1歳児期妻・夫）

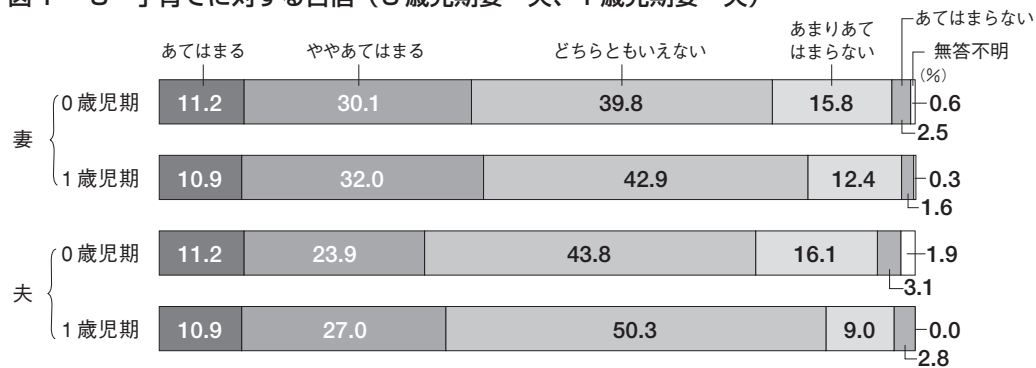


図1-4 子育てでの悩み（1歳児期妻、自信あり・なし群別）

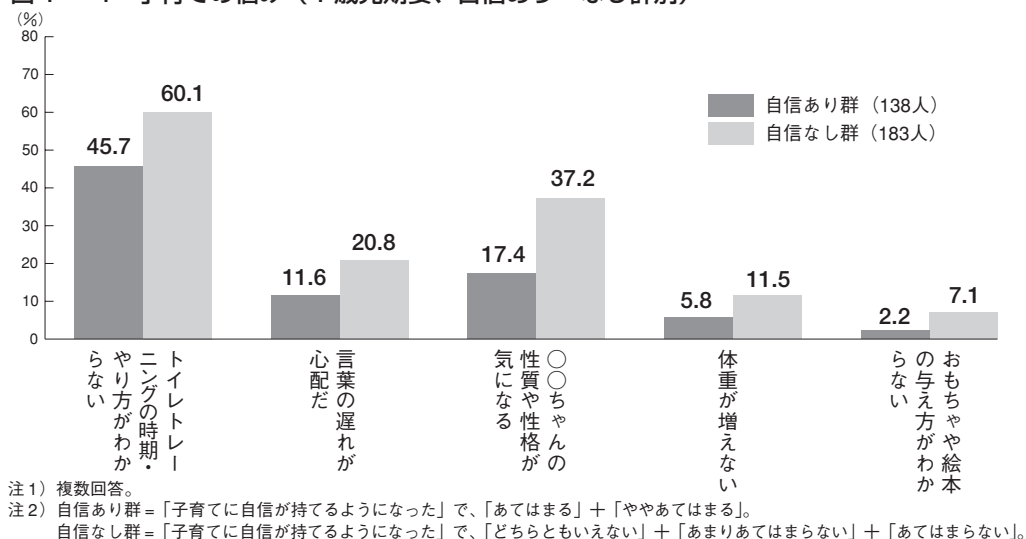
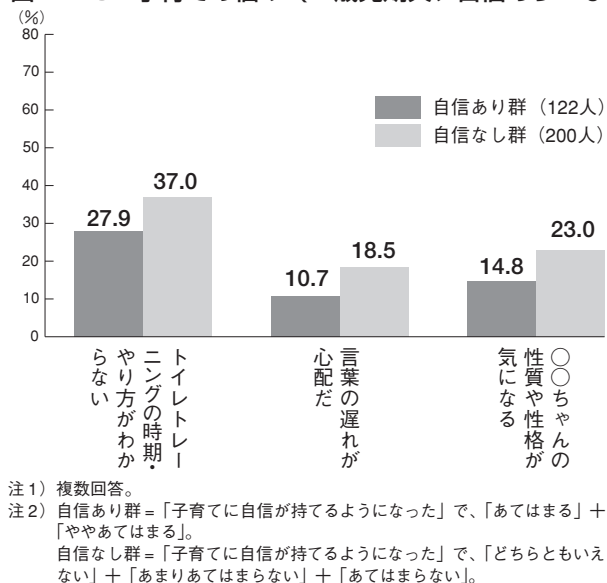


図1-5 子育てでの悩み（1歳児期夫、自信あり・なし群別）



## ● 子育てに対する自信と子どもとのかかわり（1歳児期妻）

1歳児期妻の子育てに対する自信と子どもとのかかわりに着目する（図1-6）。子どもとのかかわり全13項目のうち、自信あり群のほうでより頻繁に子どもへのかかわりが持たれていたのは5項目だった。「あてはまる」の得点差が大きい順に、「話すのを喜んでいる」（21.3ポイント）、「要求を言葉で表す」（21.2ポイント）、「温かくやさしい声で話す」（17.4ポイント）、「遊び方の見本を見せる」（16.1ポイント）、「最後まで聞く」（15.5ポイント）であった。反対に自信なし群のほうで「あてはまる」の項目が高かった項目として、「つい〇〇ちゃんをほかの子どもと比べてしまう」（6.4ポイント）がみられた。

## ● 子育てに対する自信と子どもとのかかわり（1歳児期夫）

次に、1歳児期夫の子育てに対する自信と子どもとのかかわりに着目する（図1-7）。自信あり群のほうでより頻繁に持たれていた子どもへのかかわりとして、「あてはまる」の得点差が大きい順に、「最後まで聞く」（21.1ポイント）、「要求を言葉で表す」（18.4ポイント）、「遊び方の見本を見せる」（17.9ポイント）、「温かくやさしい声で話す」（16.4ポイント）、「話すのを喜んでいる」（14.3ポイント）、「〇〇ちゃんが自分ですようとしていることは、危険でない限り、できるだけ手を出さずに最後までやらせるようにしている」（11.9ポイント）、「〇〇ちゃんに『遊ぼうよ』など声をかけながらおもちゃを差し出して、遊びに誘っている」（10.6ポイント）、「あいさつの声かけをしている」（8.9ポイント）の8項目があった。「ついほかの子どもと比べてしまう」は、妻同様に自信なし群のほうで高く、自信あり群との差は2.0ポイントであった。

## ● 子育てに対する自信と養育スタイル

以上、自信あり群と自信なし群とで比較した子どもへのかかわりは、1歳児期妻と1歳児期夫とで重なる部分が多かった。つまり、子育てに自信のない夫婦では、これら子どもに対するかかわりが、自信のある夫婦に比べて、少なくなってしまう可能性がうかがえた。「ついほかの子どもと比べてしまう」ような子育ては、そうした夫婦にみられる子育ての、特徴的なスタイルと言えるかもしれない。

自信のない妻・夫のかかわりの少なさには、先に分類した、〔教え、導く〕型の養育スタイル（「遊び方の見本を見せる」）と、〔共感し、見守る〕型の養育スタイル（「要求を言葉で表す」「最後まで聞く」）の両方にみられた。この結果から、子育てに自信のない夫婦のもとでは、子どもがいずれのスタイルの養育も受けにくくなってしまう可能性が考えられた。もっとも、先にも触れたように、子どもの発達上の変化に応じて進む子育ての特質として、「温かくやさしい声で話す」ことが、必ずしも適切とは言えない場合もあるだろう。また、話すのを喜び、結果として、子育てに対する自信を深めていくためには、子どもの側の言葉の発達も、1歳児期では十分な状態にないことも考えられる。何より、子育てに自信のないことが、そのまま、実際の働きかけの少なさを示すとも限らないだろう（自信はあまりないが、そのような働きかけを成すように努めている夫婦も少なくないだろう）。今後さらに、どのような状況におかれた夫婦がより自信を持ちやすく、実際にかかわりを持ちやすいのかを調査し、子育てをしながら次第に自信も深めていけるような、周囲の支援について明らかにすることが求められるだろう。

図1-6 子どものかかり (1歳児期妻、自信あり・なし群別)

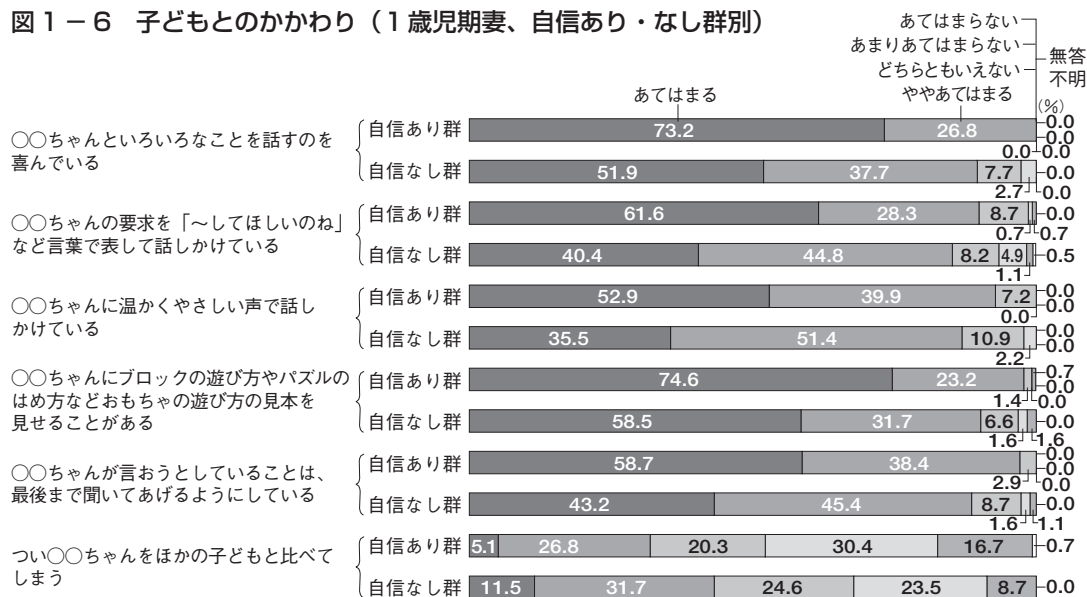
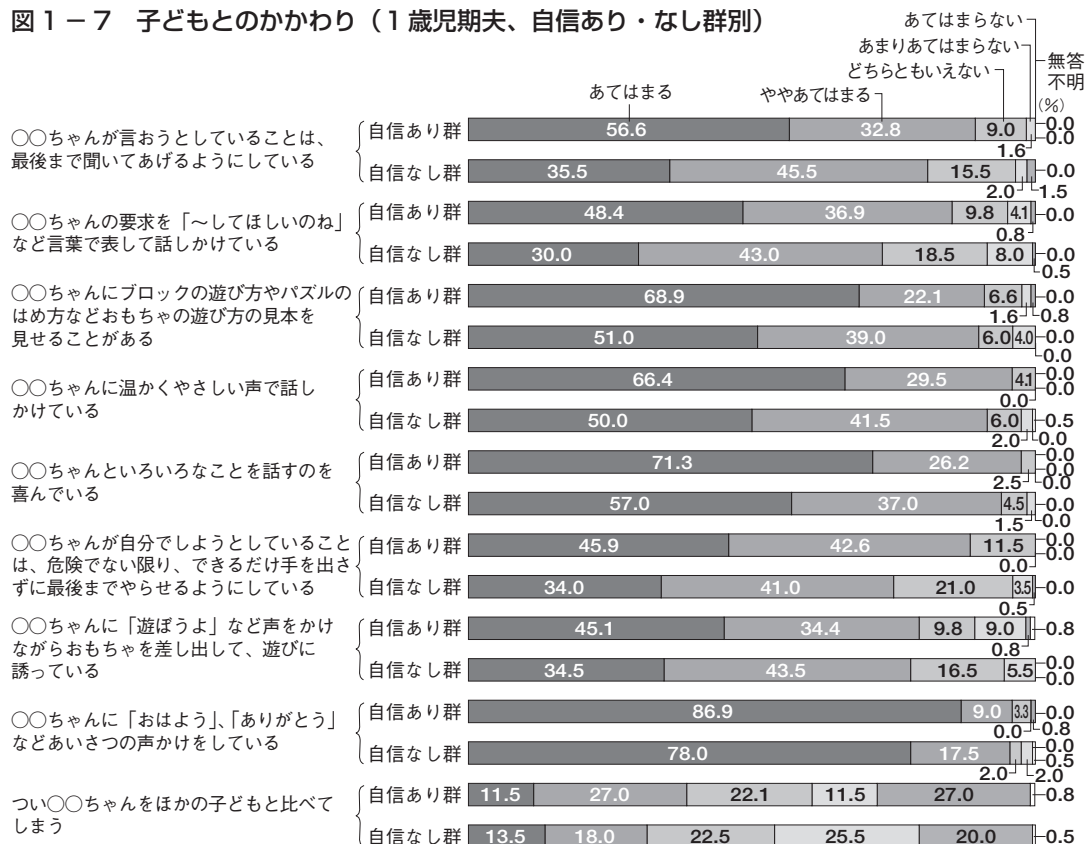


図1-7 子どものかかり (1歳児期夫、自信あり・なし群別)





## ● 1歳児期の子どもの様子

初めての子どもを持つ妻・夫は、子どもが0歳から1歳となる時期に、子どもの様子をどのようにとらえているだろうか。子どもの様子を尋ねた10項目について、〔妻-夫〕間、および、〔0歳児-1歳児〕時点のそれぞれで特徴と変化をみた（図1-8）。この質問項目は、1）子どもの愛着行動4項目「私に抱っこされたりかわいがられたりすることを喜び、そうしてほしい」「私のひざの上や胸の中にくつろぐのが好きである」「この子は誰よりも私になついていると思う」「この子は誰よりも私のことが好きだと思う」、2）困ったときに自分を頼りや判断材料にする行動3項目「初めての場所でも、慣れれば私から離れて遊ぶことができ、何か困ったことがあると私を頼りにして戻ってくる」「危なそうに見えたり怖そうに見えたりすると、私の表情を見てどうしたらよいかを判断する」「遊んでいるとき、時々私を呼んだり、私のところに戻ってきたりする」、3）指示待ち・指示への従い行動2項目「私が『だめ』と言ったり叱ったりすると、少なくともその時は言うことをきく」「してほしいことがあるとき私に『待っててね』と言われると、しばらく待つことができる」、4）後追い行動1項目「私の姿が見えなくなると、泣いたり後追いをしたりする」の4つの観点から、子どもの様子を把握することを目的としている。回答者である親は、これらの質問について、5件法（「あてはまる」5点～「あてはまらない」1点）で回答することが求められた。なお、子どもの0歳児期の様子については、妻もしくは夫のどちらかが回答している。

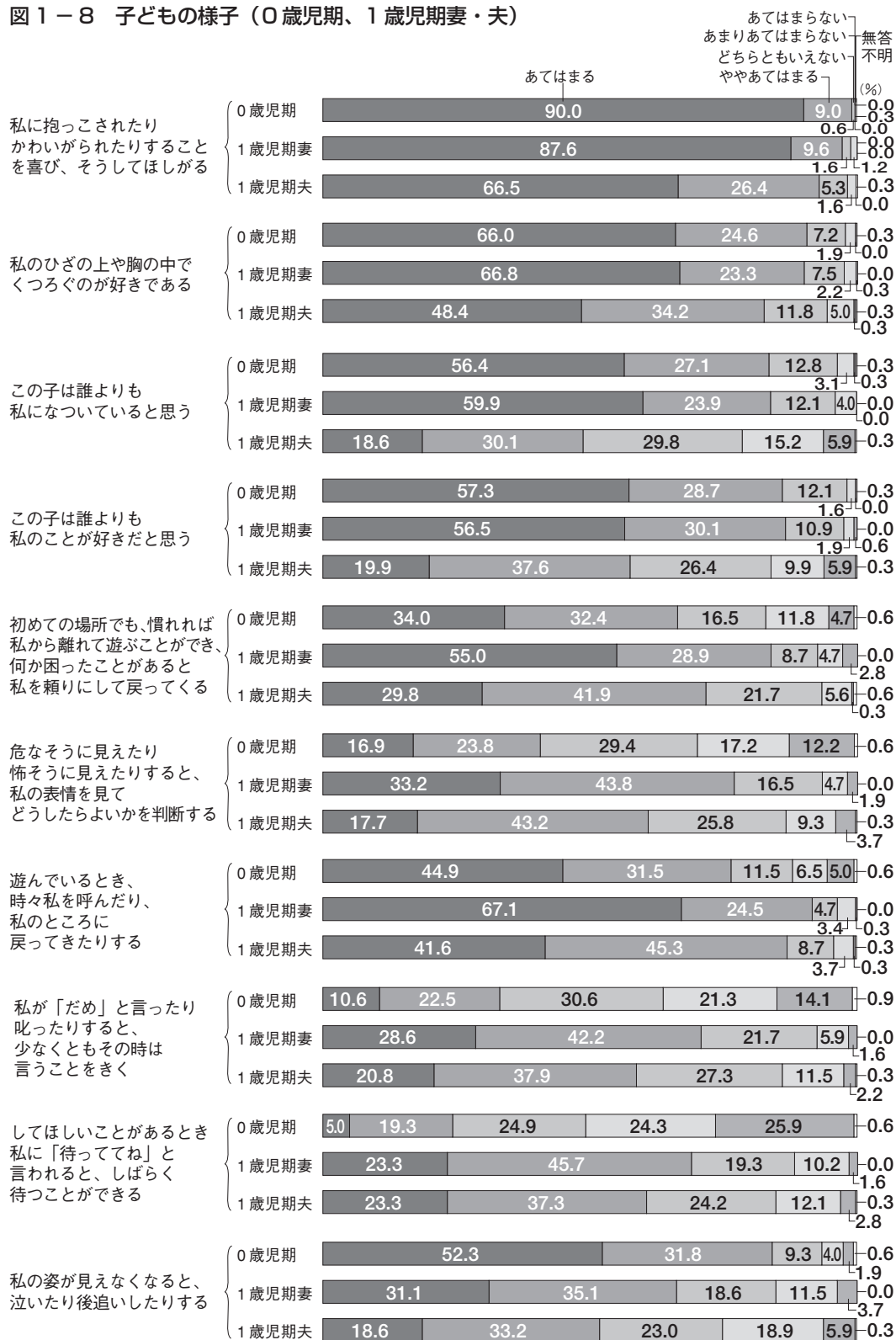
全体的な特徴として、子どもの様子を把握する4つの観点が、「あてはまる」と回答された割合に反映された。

最初に、愛着行動の評価4項目については、0歳児期と1歳児期妻とで数値の変化はほとんどなく、これと比較して1歳児期夫の値が低く示された。特に、「誰よりも私になついていると思う」と「誰よりも私のことが好きだと思う」の2項目については、〔妻-夫〕間、および、〔0歳児期-1歳児期夫〕間のそれぞれで大きな差がみられた。「誰よりも私になついていると思う」について、1歳児期妻（59.9%）と1歳児期夫（18.6%）の差は41.3ポイント、0歳児期（56.4%）と1歳児期夫（18.6%）の差は37.8ポイントであった。

次に、困ったときに自分を頼りや判断材料にする行動の評価3項目については、0歳児期と1歳児期夫との間で数値の変化はほとんどなく、これと比較して1歳児期妻の値が高く示された。これは、妻のほうが子育てに多くかかわり、結果として「子どもと一緒に遊ぶこと」や「子どもにとって初めての場所に連れて行くこと」、さらにそのような状況で、「危なそうに見えたり怖そうに見えたりする」経験が生まれ、そのとき一緒にいる母親が大いに頼りにされている実際を示している。また、そのような経験が積み重ねられた結果として、子どもにとって母親と父親が同時にいる場合でも、緊急の際には母親が選択される（頼りにされる）という現象が起きていることが想像される。

指示待ち・指示への従い行動の評価2項目については、妻・夫ともに0歳児時点に比べて数値が上昇していた。「少なくともそのときは言うことをきく」は0歳児時点で10.6%であったが、1歳児期妻で28.6%（プラス18.0ポイント）、1歳児期夫で20.8%（プラス10.2ポイント）の上昇がみられた。また、「しばらく待つことができる」は0歳児時点で5.0%であったが、1歳児期妻・夫ともに23.3%（プラス18.3ポイント）の上昇がみられた。この変化には、子どもの側の要因一

図1-8 子どもの様子(0歳児期、1歳児期妻・夫)



注) 0歳児期については、妻もしくは夫のどちらかが回答した結果を示す。



発達に伴い、「言うことをきく」ことができるようになったり、「待つ」ことができるようになってきたという変化—が影響していると考えられる。

最後に、後追行動の評価1項目についても、子どもの発達の要因が影響しているように思われる。0歳児期で「姿が見えなくなると泣く」項目の割合は52.3%であったが、1歳児期妻で31.1%（マイナス21.2ポイント）、1歳児期夫で18.6%（マイナス33.7ポイント）の減少がみられた。子どもの内面に愛着対象が形成され、たとえ姿がみえない場合でも、信頼関係が揺らぎにくくなってきたような変化を示していると言えるだろう。

## ● 1歳児期の子どもの様子と子育てに対する自信

次に、1歳児期の子ども様子と子育てに対する自信との関連に着目する。自信は先ほど同様、「子育てに自信が持てるようになった」の1項目（5件法、「あてはまる」5点～「あてはまらない」1点）を用いて尋ねた。5件の回答群のうち、「あてはまる」と「ややあてはまる」の回答を合計したものを自信あり群とし、「どちらともいえない」から「あてはまらない」までの回答を合計したものを、自信なし群として比較を行った。

1歳児期妻では、10項目のうち5項目（先に分類した3つの観点）について、自信あり群のほうが子どもの様子をより肯定的あるいは頻繁にとらえていた（図1-9）。得点差の大きかった項目から順に、「慣れれば私から離れて遊べる」（25.3ポイント）、「しばらく待つことができる」（18.8ポイント）、「誰よりも私になついていると思う」（14.5ポイント）、「私の表情を見て判断する」（14.0ポイント）、「抱っこされたがる」（7.8ポイント）であった。

1歳児期夫では、10項目のすべてにおいて、自信あり群のほうが子どもの様子をより肯定的にとらえていた（図1-10）。得点差の大きかった項目から順に、「抱っこされたがる」（22.3ポイント）、「遊んでいて私を呼んだり戻ったりする」（18.8ポイント）、「私の表情を見て判断する」（15.0ポイント）であり、もっとも得点差の小さかった項目（「姿が見えなくなると泣く」）でも12.2ポイントの差があった。

以上の結果から妻・夫ともに、子育てに自信のない群では、1）子どもの愛着行動、2）困ったときに自分を頼りや判断材料にする行動、3）指示待ち・指示への従い行動のそれぞれの行動を、やや少ないにとらえていることが示された。ただし、子育てに自信のない群がこのように子どもの様子をやや否定的にとらえており、その結果として子育てに対する自信を深められないでいるとして、このような悪い循環がその後の子育てにおいても永続するとは限らないだろう。子どもには個性があり、愛着行動を強く示すような個性の持ち主もいれば、穏やかにそれを表現する個性の持ち主もいる。また親の側も、そのような愛着行動を受け止め、適応的に子育てを行う者もいれば、そのような愛着行動への敏感な（感受性高い）反応を、あまり得意としない親もいるだろう。総じて、愛着行動の形成が、子と親の双方に求められるような1歳児期の子育てが、あまり得意でない親が、その後の長期にわたる子育て全般を苦手にするとは一概に言えないのであり、例えばこのような親が、子どもが思春期を迎えた時期に、子どもにとってもっとも望ましい親となる可能性も秘めている。このように子育ては、〔子—親〕間の個性のマッチングを抜きには語れないのであり、双方が持つ、発達する個性と個性の衝突の中で、必要に応じて修正や調整が施されるような、子育て環境の整備が求められると言えるだろう。

図1-9 子どもの様子と子育てに対する自信（1歳児期妻、自信あり・なし群別）

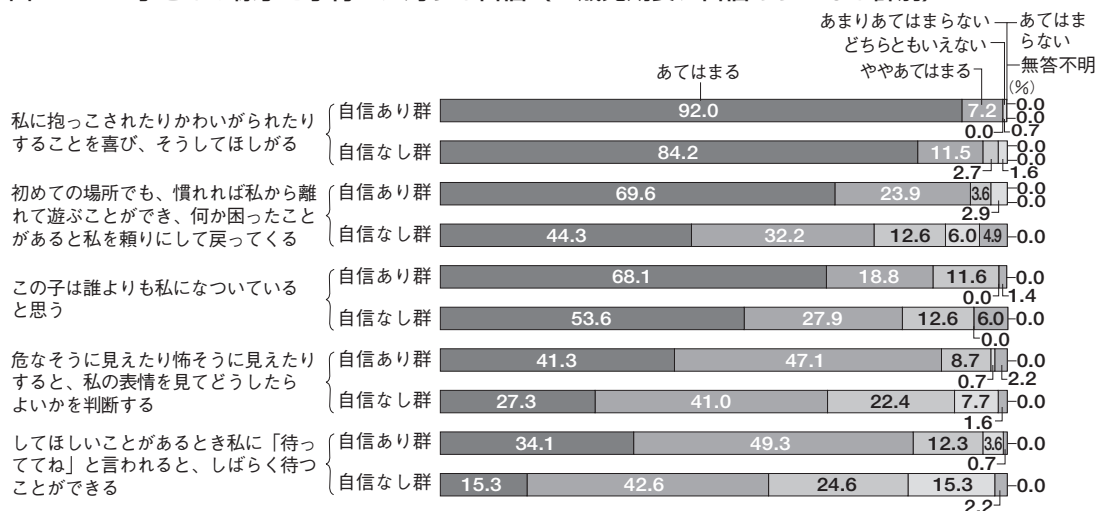


図1-10 子どもの様子と子育てに対する自信（1歳児期夫、自信あり・なし群別）

